

### 金澤古蹟志卷十四

#### 城南堅町筋

#### ○魚屋町

馬淵高定の武家混目集に、元祿三年三月十六日新堅町より  
 出火し、巽の風烈敷、新堅町不殘、本堅町・魚屋町・水車等  
 焼失す。と見ゆ、同六年の土帳に、堅町・魚屋町後・柿木昌  
 杯と數所に載せたり。今魚屋町の名絶えて久しき故にや知  
 る者なし。此の町は片町より堅町へ出づる四辻より、河原  
 町への入口までをば、昔は魚屋町と稱し、河原町に屬せり  
 と云ふ。そのさき此の地に魚市場をば建てたりし故に、魚  
 屋町と呼びたりしかど、享保の末頃にや市場を廢し、其の  
 後は河原町の町内に屬して、魚屋町の名絶えたり。故に文  
 政四年無名の町地に町名を建てたる時、更に龜澤町と名付  
 く。然るを明治四年四月町名改革の時、龜澤町の名を廢し、  
 堅町へ合併せり。

#### ○魚市場來歴

舊傳に云ふ。昔は金澤の魚市場、犀川と淺野川口と兩所に建  
 ちたり。犀川の魚市場は、堅町の入口魚屋町なり。淺野川  
 口の魚市場は袋町なりしを、後に近江町へ移せりと。按ず  
 るに、金澤町會所留記に載せたる享保六年十二月廿八日の  
 書札に、兩魚問屋給銀五貫目宛之處、來る寅年より新銀四  
 貫五百目宛に被仰付。とある兩魚問屋は、近江町と此の魚  
 屋町との兩問屋なりといへり。淺野茂枝曰く、昔魚市場兩  
 所に建ちたる頃は、鹽問屋も兩市場に在りて、鹽屋六兵衛  
 と云ふ者即ち魚屋町に居住し、鹽問屋を勤めたり。鹽は魚  
 類に屬する譯にて、昔は魚市場に鹽問屋を置かれたり。鹽  
 魚に入用なりし故ならんか。又そのさき兩市場を置かれし  
 頃は、安宅・本吉・相河など上口の浦々に取揚ぐる魚は、犀  
 川の魚市場へ運送し、宮腰・根布・荒屋・高松浦などに取揚  
 ぐる魚は、淺野川の魚市場へ運送す。且能登の七尾・輪嶋、  
 越中の水見・放生津・岩瀬・魚津などの浦々より運送する魚  
 鳥は、向寄りなれば多分淺野川魚市場へ持來るゆゑに、近  
 江町は運送方辨利なりとの事にて、犀川口魚市場をば近江